

ITER及び幅広いアプローチ(BA)計画の2件の講演に関する質疑応答（敬称略）

寺嶋（政策投資銀行）：エネルギーは日本にとって重要な問題であり、二点質問があります。一つめは、BAの期間は10年ですが、遠隔実験センターは10年後に使われるので、その辺のことをお話戴きたく思います。二つめは、トリチウムの研究について。小柴さんがトリチウムに関して懸念を示されていますが、実現に向けて重要な研究領域であり、BAで位置付けることができないのかどうか？

板倉：ひとつめですが、BAは建設期間の10年であり、当然ながら、残された施設を解体するのでは無く、活用して行きます。遠隔実験センターはITERが出来上がった後に活用するのが主目的です。BAのフレームワークではないが、国際的に開かれた活動に供していきます。BAに対しては日欧で460億円ずつ出すことになります。スパコンに関しては、10年間でどれくらい運転するかはスケジュール次第です。遠隔実験センターについてはBAでは建設が主目的です。その後の運転については920億円の枠外ですが、施設を有効活用していくことになります。

松田：特に、トリチウムをプラントとして活用するノウハウはサイトに蓄積されるため、ITERの参加者から得られる情報を有効活用しなければなりません。日本自身がトリチウムに関する研究をやらないのは問題です。BAの中でもブランケットはトリチウムも扱う必要があります。現在日欧間で、工学R&D計画の調整を行っています。国内で行われる原型炉に向けた研究についても原型炉国際設計活動センター（原型炉設計・R&D調整センター）が調整機能を持つことになります。国内でもやりますが、日欧が共通して関心を持つことはBA計画の枠組みで行うことが大凡合意されています。専門家間で今後煮詰めて行くプログラムも含まれています。